

TS（トータル・サティスファクション）を目指して③

「生徒たちが心から学校を信頼してくれる」方法

校長室担当より

サッカーの指導をするコーチに、今でこそ数は減りましたが、「何やってんだ！」と選手を力で押さえつけ、厳しいトレーニングを強要し、目の前の結果を出れば、ことさらこれを強調し、さらに厳しいトレーニングを重ねていく手法を取られる方がいました。これは、「Do（私の言うとおりにトレーニングすれば）→Have（勝利が手に入り）→Be（気持ちよくなれる）」という考え方。勉強に例えるなら、「Do（私の言うとおりに頑張って勉強すれば）→Have（成績があがり、いい大学・いい会社に入り）→Be（幸せになれる）」という考え方と同じですね。これは、「無理をしてもそれができないと人生はうまくいかない」という強迫観念を植え付け、生徒に努力や無理を強いるのにも利用されます。この考え方は破綻しています。一時的には成績が上がることはありますが、長期的にはうまくいきません。これでは、いつも何かに追われ、終わらない努力を永遠に続け、勝てば優越感に浸り、負ければ劣等感を感じ、常に結果に一喜一憂する人間になるだけで、人生は豊かにならないのです。

順番が異なるのです。私は、アメリカの哲学者であるウィンザー・ミケーリによって提唱された、「Be→Do→Have の法則」が人間の特性上正しいと考えています。簡単に言えば、Be（自分の可能性や未来を信じていられる私でいると）→Do（夢や目標に向かって行動できて）→Have（その継続の結果、欲しいもの、なりたかった自分を手に入れることができる）という考え方です。勉強に当てはめるなら、「（無理に課題を出すなどの）努力しないと、成績が上がらず、不幸になる」と強制するのではなく、「今の自分には大きく成長する可能性があると感じられる。だから、自分からこの力を身に付けよう。そうすれば手にする結果は素晴らしいものとなる」という姿勢を自然にもってもらうことが、人間の本質において大切なのです。つまり「心」が常に先だということ。

そのためには、周囲にいる私たちが、「私は夢が叶って先生になれたんよ、いいでしょう。」とか「昨日、こんないいことがあったんよ、大人っていいでしょう。」と事あるごとに語る。そして、笑顔を絶やさず、いつも上機嫌でいる、誰に対しても丁寧な言葉で目を合わせて話す等、最

も人間的に大切な部分を、まだまだ成長段階の彼らに示すことが大切です。そうすれば、生徒たちは自然に「生きているっていいな。」とか「あんな幸せな人に私もなりたいし、なれる。」と感じ、「そのためにはどう行動すればいいか」を自分で考え、「素晴らしい人生を手にする」展望をもてるようになります。そのモデルを、まずは私たち教員が示していきましょう。やったことのない方は「そんなことで？」と思われるかもしれませんが。でもやってみましょう。物理学でいう「共鳴振動」が必ず起こります。これが、私たち教員が達成すべき部分であり、「最も学校を良くする」＝「生徒たちが心から学校を信頼してくれる」方法だと私は信じています。いい学校を創りましょう、一緒に。(令和6年5月15日)

4月1日に、先生方へお願いしたこと（確認）

- 1 人間の生き方のモデルを姿で示していただく
- 2 トータル・サティスファクションの実現
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームへ